安部 光壱
Kouichi Abe

曠野の花

石光真清の４部作（「城下の人」、「曠野の花」、「望郷の歌」、「誰のために」）のうち、第２作目「曠野の花」についての紹介

１．はじめに

（１）第一作目の「城下の人」は、石光真清（以下、真清という）が生まれた 1867 年（明治元年）から幼年学校、陸軍士官学校、日清戦争に中尉として初陣をしたときまでの物語である。最後、真清は日清戦争後の三国干渉や 1891 年（明治 24 年）の大津事件でのロシア帝国の脅威を感じ取り、将来起こりうるロシアとの大衝突に対し、ロシアに対する情報員になることを決意するところで終わる。

第二作目「曠野の花」では、1899 年（明治 32 年）８月 25 日から日露戦争が始まる 1904 年（明治 37 年）２月３日までの真清が軍籍を捨て、留学生あるいは労働者となって、ロシア、満州の情報活動をする有様を描いている。
この物語は、マイナス 30℃を下回る極寒のシベリア、人間の命を屁とも思わない馬賊の生きざま、略奪と殺人、女郎や一攫千金を狙うものたちの奇抜な行為、清国・ロシア・朝鮮・日本のスパイ達の駆け引き等の、正義とか常識をかなぐり捨てた者たちの赤裸々な生きるための戦いが描かれている。

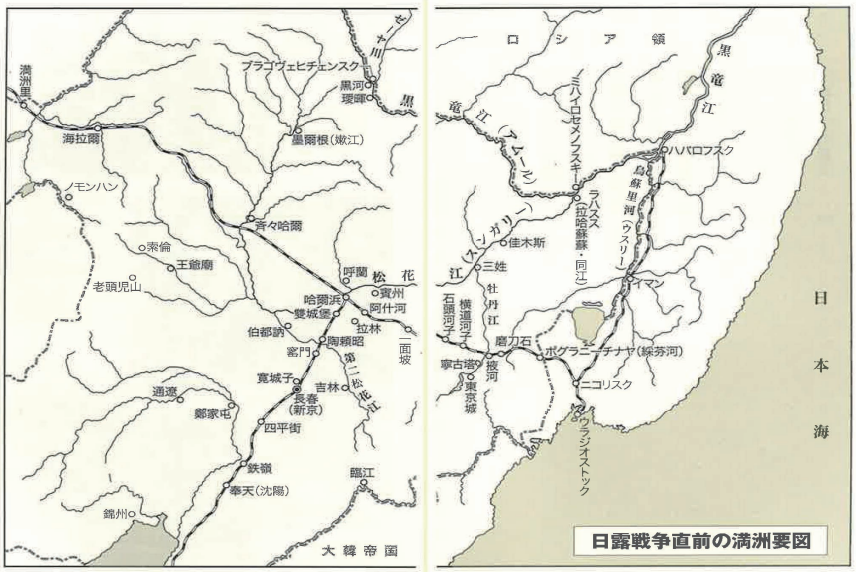
それはノンフィクションとはいうものの、冒険小説、スパイ小説、戦争小説をはるかに超えた迫力である。

（２）このエッセイの構成

真清がシベリア・満州で経験した約４年間は、どの部分をとっても日本人には馴染みの薄い部分である。それだけにワクワクするし、感想すら出てこないほどである。満洲は、日露戦争勝利後は稀有な実験国家、国際都市（国）と発展するが、この物語はその少し前の激動期のシベリア、満洲が描かれている。これを以下に分けて振り返ってみることにする。

①曠野の花の時代はどんな時代だったか
②曠野の花のあらすじと真清の足取り
③馬賊という存在
④ブラゴヴェヒチェンスクの大虐殺
⑤曠野の花＝女郎達
⑥真清の文章のタッチ
⑦最後に
（頁数は「曠野の花」の頁を示す）

小説からの引用は基本的に下線を引いた。特に指摘したい部分は二重下線とした。この物語に登場する「名称と登場人物」は別に資料を添付した。



＜荒野の花改訂版より＞

2.「曠野の花」の時代はどんな時代だったか

この物語は、真清が 1899 年（明治 32 年）8 月 25 日、ロシアに語学留学に出るところから始まる。

「<u>青黒い北の海には早くも秋風が吹き始めた 8 月 25 日（明治 32 年）ウラジオストックの桟橋に着いた日本郵船相模丸のタラップから、船長を先導にして日本郵船社長近藤康平、参謀本部次長田村怡与造大佐、町田経宇大尉がいずれも平服姿で降りて行った。その後からトランクを片手に、港に連なる街並を眺めながら降りたのが、当時休職の歩兵大尉でロシアへ私費留学を許されて来た私であった。</u>」（P7）

といささかジェームズボンドがミッションをおびて、颯爽と船のタラップを降りてくるような出だしである。この時、真清は 37 歳。まさに壮観な出で立

ちだったことであろう。彼を待ち受けるウラジオストックは、東洋征服を意味する町の意味であるが、商人は殆ど清国人であり、労働者は大部分が韓国人であった。十数年前には町に虎が出て市民を脅したこともあるなど淋しい漁港だったそうである（P7）。

この物語はその時代から日露戦争が勃発する 1904 年（明治 37 年）2 月 3 日までの 4 年間の内容が記載されている。この 4 年間は歴史的に言うと説明が非常に難しいが、私の理解で言えば 1900 年（明治 33 年）に義和団事件が北京でおこり、西欧列強が中国とりわけ満洲の利権を奪い合い、その牙をむいていた時期で、来るべき日露戦争、シベリア出兵の前兆期である。

日本は三国干渉の悔しさから、富国強兵等を推し進め、満州におけるロシアの脅威が目の前に迫ってきていたという恐怖をロシアを知る人物達には感じ取っていた。

３．曠野の花のあらすじと真清の足取り

（１）それではまず、この物語のあらすじと真清の足取りを追ってみる。

本物語は 1900 年（明治 33 年）8 月 25 日に真清がウラジオストックに着いた時から、1901 年（明治 34 年）2 月 20 日ハルビン（哈爾賓）で写真館を開くときまで（P231）の前半部分と、写真館を開いてからロシアの諜報活動が専門化し、ロシアとの対戦がいよいよ現実化していく後半部分とに分かれる。どちらかと言うと前半の方がスリリングであり奇想天外である。後半は心が重たくなる。前半は真清はいろんな異色な人物に会う。謎の住職、実は日本人のスパイである住職清水松月こと花田仲之助中佐、本願寺出張所安倍道暝師、お君、お花、お米、お豊、お槇らの「曠野の花」（女郎達）との出会いなどがある。しかし、全編を通じての馬賊との交流が面白い。

真清はウラジオストックに到着の後はブラゴヴェヒチェンスクに行き、再びウラジオストックに戻り、それからニコリスク、ハバフロスク、ハルビンへと行動している。その間に、1900 年（明治 33 年）7 月 15 日のロシア軍による清国へのブラゴヴェヒチェンスク 3,000 人の無差別大量虐殺に遭遇する。これほどひどい虐殺が世界史上にあったのかと驚くばかりである。この大量虐殺が清国の滅亡へと繋がり、日露戦争の引き金となっていく。

（２）真清は写真屋になる前に、1900 年（明治 33 年）9 月 5 日、洗濯の経験は全くないのにハルビンで洗濯屋を開業しようとする。そして、ハバロフスクからハルビンに向う陸路の途中、お豊、お槇、お米という逃亡に疲れた 3 人の女郎と遭遇する。彼女らの様子はまことに圧巻である。真清は 3 人の女郎を助けたのはいいものの、馬賊の馭者に奪い取られてしまう。そして真清はアジハ（阿什河）で 1 週間ほど原因不明の熱にうなされる。しかし、馬賊の頭目の手下の

趙に看病をしてもらい、快方に向かう。

（3）アジハ（阿什河）では日清戦争時代の日本人捕虜が未だに監獄に投獄されているのに遭遇し、涙を誘う。この捕虜は6年前に拉林で捕らえられたまま北京政府からその存在を忘れられ、投獄されたままになっていたのである。彼は既に精神的に無の状態になっていた。真清はその男に耳元で囁く。「君、通訳の韓国人も帰った。日本語の分かる者は私以外誰もいない。遠慮なく言ってくれたまえ。君は日本の軍人で唖を装っているに違いない。その気持ちは同じ軍人である私にはよく分かる。君、話してくれたまえ」「君の精神は立派だ。故郷では君は戦死したものと思っているだろう。」と言う。すると、死人のように静かに瞑目したその男の両眼から、大粒の涙がこぼれ落ちる。真清も涙を流した。外国の見知らぬ土地で死線を超えての戦いを経験している者どおしだからこそ通じ合えた涙である。そしてこの男は翌日すぐ息を引き取った。真清はその男に対し次のように結んでいる。

「悲壮なる日本男子よ、君の苦節6年の精神は必ず日本の同胞に伝えよう。私は病院長の許しを得て、死体を引き取り北門外の墓地に葬って心からの念仏を唱える。」日本人として、日本人軍人としての矜持を示すとともに悲惨な戦争の実態がここにもよく表れていると思う。

（4）その後、真清はハルビンに向い、途中、東清鉄道に従事する日本人石工に会ったり、12名の馬賊の斬首刑を見たりした。

（5）1900年（明治33年）10月半ば頃、ハルビンで真清はロシア軍スパイの崖と男に扮したお花の協力で洗濯屋を開業する。

（6）そして、再びウラジオストックに来るように日本政府からの連絡がありそこへ向かうがその途中、真清は拉林で獄舎に投獄され、1～2ヶ月の投獄の後、奇跡的にお米と出会い助けられる。

真清はお米とともにウラジオストックまで一緒に行くが途中マイナス30℃の凍土の中で行方を絶ってしまう。

（7）又、その途中、阿什河で真清に大恩義のある馬賊の頭目、増世策の死亡を知らされる。

（8）ウラジオストックでは、町田経宇少佐、武藤信義大尉らと今後の真清の役割について話し合い、ハルビンで写真館を開くことになった。しかし、ハルビンで写真館を開くと決まったものの、お花から、誰かが真清が陸軍出身であるとの情報を流し、ハルビンに戻っては危険であると伝えたことから、再び真清は1901年（明治34年）7月4日逃亡を開始する。逃亡中にも途中、日本人男2人、女12人の裸の船を見つけてそれらを救出する。

（9）ハルビンの噂も下火になり、1901年（明治34年）9月、ハルビンで写真館は開業する。そこで真清は希望していた満州南下の旅をしようとする。またお

花は日本に帰りたいとの希望を述べ、1901 年（明治 34 年）9 月 25 日お花と二人でハバロフスク経由ウラジオストックに向かう。

（10）1901 年（明治 34 年）10 月、真清は陸軍予備役に復帰する。

（11）1901 年（明治 34 年）12 月 18 日、真清は長崎経由で熊本に戻り、妻の実家に初めて訪れる。

1901 年（明治 34 年）12 月 24 日、東京に戻る。

（12）1902 年（明治 35 年）2 月 7 日、再びウラジオストックに戻り、15 日、ハルビンの写真館に到着。写真館は繁盛している。この頃真清は北京を本拠とする志士の一団の一人、長谷川四迷（二葉亭四迷）とも出会っている。

（13）1902 年（明治 35 年）6 月、真清は再度の南下旅行を行い、天津で安倍道暝師とも出会っている。彼は良質の撫順炭坑の発見者でもある。安倍道暝はアラビアのロレンスにも似たカッコよさがある。

（14）真清は、1902 年（明治 35 年）6 月 30 日カザック兵に捕まり二度目の留置となるが、5 日目 300 ルーブルの賄賂で解放される。

（15）その後、チチハル（斉斉哈爾）でもカザック兵に捕まえられ約 1 週間後 200 ルーブルで釈放される。

（16）さらに、満州軍でも臨検に引っ掛かり留置所に約 2 週間 300 ルーブルを支払って釈放される。

（17）菊地写真館はハルビン本店の外に東方地区に一面坡とポグラニーチナヤ、西方地区に満州里、そして、旅順、大連に支店を置いた。長春、遼東には雑貨屋を開設した（P317）。ブラゴヴェヒチェンスクにも写真館を置いた。これで大体満州全土に網が張られた。

明治 36 年 10 月には、殆ど完成した。この中で写真館らしい写真館はハルビンと大連だけだった。

（18）1902 年（明治 35 年）10 月、真清は長崎から東京へと戻る。日本郵船、大阪郵船も大阪－門司－長崎－大連の航路を開いた。旅客も貨物も目に見えて増加した。長春、奉天、遼陽を初め、鉄道沿線の各地はロシアが放出する黄金の雨に、蟻のように人が集まった。

（19）1903 年（明治 36 年）3 月 3 日、真清は東部本線の視察の旅に出る。ボグラニーチヤナまで行き、戻る途中に横道河子に着いた時、増世策夫人のお君に会う。

（20）1903 年（明治 36 年）7 月末、大連に滞在していると信濃丸で陸軍少将上原勇作が到着「どうも嵐が近いようだ」と言われる。

（21）同年 11 月、ロシアの陸軍大臣クロパトキンが日本を訪問。在留邦人の間に動揺が広がり、帰国が始まる。

（22）1904 年（明治 37 年）1 月、在留邦人の数がめっきり少なくなって残留者 370 ～ 380 名となる。

(23) 同年 1 月 30 日、ウラジオストックの貿易事務官と牛荘の領事から「日露の国交危機に瀕す。至急在留民は引き揚げ帰国すべし」との秘報が来た。

(24) 同年 2 月 3 日、日露戦争勃発。真清は、帰国の途中において既に予備陸軍大尉から第二軍司令部副官として招集されていた。つまり日本に帰国した途端、再びロシア、満州に戻ることになるのである。真清はこの物語の最後に「私は再び軍服を着用し、剣を吊って、万歳の嵐と日の丸の小旗の波に送られ、またも満州の曠野に立ち戻ることになった。『ああ、お前は桜の国を心から愛しながら、結局、日本には置いて貰えない男だよ』私は自分で自分に言い聞かせながら、長女と次女に頬ずりをして立ち去った」

以上があらすじである。

前半は波乱万丈、後半は戦争の色が濃くなり、戦争の足音が聞こえてくる。後半、馬賊の野蛮さ、女郎たちの勇敢さ（？）が影を潜め、全体にそれらより怖い戦争の悲惨さが物語を埋め尽くしてきているように感じる。

4．馬賊という存在

(1)「曠野の花」の中心は何といっても馬賊である。馬賊とは要するに山賊である。統率のとれた山賊である。馬賊は、一頭目の元に二、三百人から千人くらいの配下を持ち、一旦加盟すると脱退することは出来ず、血でその結束を維持する。

(2) 馬賊の掟は馬鹿馬鹿しいほど簡単である。

彼らの五か条の掟（P25）は、

①機密を洩した者は斬る
②命令に反抗した者は斬る
③敵に内通した者は斬る
④脱走を企てた者は斬る
⑤同志を欺き或いは侮辱した者は斬る

(3) 彼らの闘い方は極めて幼稚である。

それは、不意打ちによる騙し討ちである。例えば清国の官兵を結託して（P154）、ロシアカザック兵に対して白旗を掲げて、阿什河（アジハ）市民はロシアに絶対服従するから至急守備隊を派遣し治安を確保されたい」と申し入れ、ロシア軍は喜んでコザック歩兵一中隊を派遣すると、阿什河の途中で数百の馬賊と官兵が突然現われて青竜刀と槍で襲撃し、12 名の死者と 35 名の重傷者を出して敗走させた。しかし、この欺し討ちにロシア軍が黙って手控えるだろうと考えるところが馬賊の浅はかなところである。

この騙し討ちに対して、直ちにロシア軍は、歩兵第四連隊の一大隊、砲兵一中隊、カザック一大隊という大部隊で反撃して阿什河全体を占領し、市民は皆

殺しされた。そして、全市にわたってカザック兵の掠奪と暴行・凌辱が行われ、清国人が全部斬殺されたのである。

「要するに馬賊は、押入り強盗には慣れているが戦争は駄目だ。てんで戦術を知らない。見ていても気の毒なくらいだ。奴らには奴らだけの智慧しかない。」（P177）と真清はハルビンで会ったロシア嫌いの憂国の志、森の言葉を借りて述べている。ロシア軍はロシア軍で、阿什河を占領した後は、戦利品を50台の馬車に乗せ、最後には豚、牛、馬を追尾させて持って帰る。同行するロシア軍の兵卒はその隊伍を勝手に離れ、掠奪品の銀の腕環や簪や馬蹄銀などをポケットから出して見物の群衆に売りつける。下手に断ればブン撲られるから、真清もやむを得ず二、三人の兵士から要りもしない銀製品を十ルーブルばかり買わされた。これが戦争というものだろう。猛獣でさえ必要以上動物を殺さないし、物も奪わない。戦争こそ暴力と人間性の否定がそこにある。

（4）馬賊は死をおそれない、死を無視している。

真清は、1900年（明治33年）2月15日愛暉で、ロシア軍の兵営の前の大樹に格子作りの箱が6つぶら下がっており、その中に紫色に膨れ上がった馬賊の首が入っているのを見た。馬賊は前日、人前で杭に縛られて、平然と首を前に差し出して斬られる順番を待っていたとのことである。

「市街の北端にある畑地で棒杭が十二本立っており、二人ずつ後手に縛られた馬賊を乗せた六台の馬車が進んできた。40歳前後から27～28歳くらいで、いずれも元気な顔付をしており、少しも憤怒や悲哀の相が現れていない。無我無心というのか、まるで人形のような表情であった。刑場に着くと、巡警は無造作に彼らを車上から引降ろし、順々に後向きに坐らせて棒杭に縛り付けた。目隠しをするでもなく、最後に慈悲の言葉一つかけるでもなく、片端から南瓜か西瓜でも切るようにボスリボスリと首を斬り落し、まだ血をふいているのに、そのまま立会人の役人と共に馬に飛び乗って帰ってしまった。十二名の生涯の最期としては、なんというあっけなさであろう。芝居じみても良いから今少しなんとか形をつけたらよかりそうなものだと考えないでいられなかった。」と真清は述べている（P166）。

これに対し、真清に同行したロシア軍のスパイ兼通訳の韓国人崖は次のように言う。「日本人としては勿論そう思うだろうね。それは支那人の心理を知らないからだよ。支那人は決してこれを惨酷だとも侮辱だとも考えていないよ。第一斬られる彼らも、最初から自分たちの最期はかくあるべしと覚悟しているのだから、別に同情を求めようとはしないさ。同情したって別に喜びもしないよ。」と真清の気の小ささを嘲笑うように言った（P167）

5．ブラゴヴェヒチェンスクの大虐殺

（1）この物語の中で最も注目すべき事実は、1900年（明治33年）7月15日のブラゴヴェヒチェンスクのロシア軍兵士による清国人に対する約3,000人の無差別の虐殺である。

私は、このような記述を今まで見たことも聞いたこともなかった。もちろん、ナチスのユダヤ人大虐殺、広島・長崎の原爆投下、さらに昔に至ってはクロンウェル（清教徒革命）によるアイルランド人の大量虐殺、又、考えようによってはアメリカ人による西部開拓史もそうであったかもしれないし、スペイン人によるインカ帝国の崩壊もそのように考えることができるであろう。

そう考えると、初めて読んだブラゴヴェヒチェンスク大量虐殺の事実は、非人間的行為の極致である。ところが、大量虐殺は時にそれが正当であったという議論も呼ぶ。広島・長崎の原爆投下や西部開拓史などそうであろう。しかしこのブラゴヴェヒチェンスクの大虐殺の記述を読むと、そんなことは絶対に言えないという気になってくる。真清はその大虐殺の模様を以下のように伝えている。

（2）7月13日、ロシア汽船ミハイル号は荷物船三艘を率い、軍需品を満載してハルビンに向かって出帆した。ところが愛暉城の江岸近くに来ると、ジャンクに分乗した10数名の清兵が漕ぎ寄って来て、一斉に銃口を差向けて停船を命じた。突然のことであったし何の警戒処置もしていなかったので、命ぜられるままに停船したが、機敏にボートで対岸のアジョール村へ船員を派遣して、この事件をブラゴヴェヒチェンスクの州庁へ打電させた。この処置が非常に効果的であった。この報を受けたアムール州軍務知事グリーブスキー中将は、直ぐにカザック騎兵大隊の一部50名と砲四門をアムール村に急派すると同時に、国境裁判官に騎兵30騎をつけ、スンガリー号で愛暉へ送って清国側の副都統に抗議を申込ませた。

事実はこれだけであったが、民間の噂は大変であった。アジョール村に一個大隊出動したとか、愛暉に清兵5,000名以上が砲を並べて待機しているとか、こうした流言が在留の清国人を驚かした。この当時のブラゴヴェヒチェンスクには清国人約3,000名がおり、多くは苦力（クーリー）と食料行商人で、立派に商舗を開いている者は約1割余にすぎなかったので、その教育もきわめて低く、誇大な噂に動揺するのも当然であった。中には気早やに店を閉じて黒河に落ちのびるものさえあった。彼等に何故逃げるのかときけば、彼等は何事が起ったか知らないが露清の間に何か重大なことが起こったに違いない、近所の者が逃げるから自分も逃げるのだと言うだけであった。

（3）15日、大して情勢に変りもない静かな朝が来た。私は早くから街へ出て歩きまわった。留守隊はほんの一部が下流へ派遣されただけで、それも偵察の程度に過ぎないようであったが、兵営の営門は絶えず騎馬の兵が出入りしていた。

午後2時頃、突如軍務知事の名によってアムールの渡航禁止令が公布された。同時に渡船はすべてロシア側へ引揚げられて繋留され、波止場は10数名のカザック騎兵によって警戒された。集まって来る清国人の避難民は無理に追い払われた。追われながら清国人が騎兵に訊ねていた。「清国人が清国へ帰るのがなぜ悪い」「悪いか良いか俺は知らん。ただの一人も渡してはならぬと命令されただけだ。さあ、街へ帰れ帰れ」

私は夕食後、ポポーフ夫人（真清の寄宿先）から受ける日課のロシア語作文を落着かぬ気持ちで始めた。夫人も暗い窓外へ眼を注いでは、何やら落着かぬ風情であった。

（4）午後6時、突然薄闇を破って物凄い震動とともに間近に何物かが爆発した。私も夫人も一瞬に起ち上った。ワアッという喊声とかん高い女の悲鳴と走り出す靴音とが混って聞えたかと思うと、続いて二度三度大爆音が地響きを伴って家を震動させた。

砲撃だ！

私は屋外へ飛び出した。家を飛び出す者、飛び込む者、悲鳴をあげて当てもなく逃げまどう者、蹴散らすように飛んでゆくカザック騎兵、大変な騒ぎになった。私は砲撃がアムール対岸の清国側からなされ、主として州庁付近に落下していると判断した。砲弾の洗礼は市民にとって初めての経験であったろう。あまりに突然のことに如何にすべきか判らなかった。炸裂するたびに、地鳴りのするたびに、何とも言えぬ声が街に挙った。

やがてこちら側から、野砲十門が火蓋を切って応え、小銃が豆を煎るように響き始めた。留守隊の応急措置としては、実に手際のよいものであった。こうして彼我の砲火を交えること約1時間の後に、薄闇のアムールは不気味な沈黙に帰った。清国側が砲撃を中止したのであった。この中止が何を意味するか明瞭でなかったために街の恐怖は募って行った。上陸作戦に移るのではあるまいか。しかし今日まで清国側に派遣してあった密偵たちの報告によれば、申告側に左様な準備が行われていたとは思われない。出来心の砲撃にしてはあまりに無謀であるが、ブラゴヴェヒチェンスク駐屯軍が夏期露営地へ出発した後だったので、清国側が明瞭にこのことあるを狙って企てたのではあるまいかと判断された。それならば、大ロシア帝国の武力を以て陳腐な清国軍の目に物見せてくれるぞと考えたのは当然であろう。

（5）ロシア軍は伝統的に出足が鈍いが、いざ腰をすえてかかると、徹底的に計画通り遂行せねば止まぬものである。

軍務知事グリーブスキー中将は露営地へ帰還の飛電を打つとともに、ロシア市民の男子には老若を問わず小銃弾薬を分配し、留守隊長の指揮の下に江岸に配置して清国軍の上陸に備えた。野砲陣も強化し、上下流に斥候を派遣して敵の動静を偵察させる一方、突如としてブラゴヴェヒチェンスク在留の清国人狩りが一斉に行われた。商店主たると苦力（クーリー）たるとを問わず、またロシア人に雇われていようといまいと、何の容赦もなく各戸から引きずり出されて支那街へ押し込まれた。それは実に徹底したものであった。もだえて泣き叫ぶ少年店員であろうと、ロシア人宅のボーイであろうと、容赦なく引立てていって手廻品の持参さえ許されなかった。こうして追い立てられ引きずり出されて支那街へ押し込まれ、カザック兵と警吏と義勇団員とによって包囲された在留清国人は、約3,000名であった。日本人使用主の情けによって隠匿された少年雇入のごく少数の者を除いては、一人としてその厄に遭わないものは無かったであろう。使用主の涙によって隠匿されたと言っても、それは日本人や韓国人を主人とするものに限られていたから、ごく少数であった。ロシア人は命令通り使用人を門外へつれ出したのであった。これは当初は、在留清国人が本国と通謀して蜂起するかも知れないという懸念から採った非常手段であったろう。

その間、在留日本人は機敏に処置を講じた。若い男子を除いて他は全部日本人墓地へ避難させた。そこは市の北端で、清国側からは射程外にあった。日本人に対するロシア人の感情は良好で、新聞にも官庁の告示にも、北京における日本軍の勇敢にして効果的な協力を賞め讃えてあったので、避難地の墓地へ食料を運ぶ日本人に対しては特例を許して、何らかの制限を設けずに優待した。すでに大津事件は忘れられているようであった。このような情勢であったから、日本人の或る者は赤十字の徽章を胸間に輝かせて、ロシアの野戦病院へ勤務を申込んだ者さえあったほどである。日露の間がこのように良好であったとは言え、日本人は決して清国人に悪意は持たなかった。清国人の狩出しが始まるや否や、日本人は申合せたように自分の清国人の使用人を、天井裏や床下や穴倉の奥に隠匿して、保護に務めた。そのため日本人の使用清国人は、ただの一人として生命を奪われた者がなかったのである。

午後2時の渡江禁止から清国人狩りに至るまでこの間、僅かに5時間。それは悠長なロシア人の仕事としては、驚くべき早業であった。それに引代えて清国側の悠長さはまたなんということであろう。自信あっての悠長さではない。無統制、無計画、無思慮から来たものである。約1時間の砲撃の後、清国側は沈黙して何の行動もとらなかった。清国内においての軍閥間の衝突ならば、1時間位の出し抜けの砲撃で度肝を抜き、威を示して置いてから、しばらく沈黙

の後交渉すれば、相手は威勢に呑まれて白旗を揚げたかも知れない。だが相手が世界最強を誇る大ロシア帝国であり、その目標がこともあろうに東亜征服の最大の軍事拠点であった。

この僅かな時間に、支那街に押しこまれた清国人 3,000 名はアムールの河畔に引き出されて惨らしくも虐殺され、老若男女を問わぬ惨殺死体が筏のようにアムールの濁流に流されたのである。それは東亜における有史以来最大の虐殺であり、最大の悲劇であった。

以上のとおり、ブラゴヴェヒチェンスクの大虐殺は、憎しみを通り越して人間性を否定する行為であった。このような大虐殺がそのままの状態で終わることはない。どの戦争でもそうだろう。これは太平洋戦争でも然りである。戦争の歴史はどちらが正しかったと言えることはないが、殺し合わないことには終わらないのが戦争である。それは、人間の行為では決してない。しかし、綺麗事を言っても正しい道は見えてこない。もっと人間性、人間の闇の部分を理解しながらも人間に勇気と希望を与える知恵と行動がないものかと痛感するばかりである。

6．曠野の花＝女郎達

（1）その馬賊と共に生き、またシベリア、満州の地にさまよう日本女性たちがいた。それが女郎達であり、花とは女郎達のことである。この本を読むと、日本は、というか、どの世界でもそうかも知れないが、軍隊が進軍し、侵略を始めるとそこには必ず女がいる。そして兵隊も家族も死を覚悟するため、住職のような宗教家がついてくるようになる。本物語は、そのような戦争の実態に眼を向けさせてくれる。

＜石光真清の手記より＞

（2）お君

ア　お君は 1900 年（明治 33 年）8 月 30 日頃、ハバロフスクで真清と出会う。お君は馬賊の頭目、増世策に好かれた女郎である。増世策は生白くやせ型の小男で、ちょっと見ると女が男装でもしているような男である。

イ　お君は、増世策について次のように述べている。「どうせ勤めの身だから増世策の相手になっていると、どうも様子がちがう。淫らなことは一言も言わないし言葉使いもやさしく丁寧でおまえの身の上は気の毒なものだなあ、ずいぶんつらいことも多かろう。だが今夜は僕が買ってやる、あすも一日買ってやる。ゆっくり骨休めをしたらよいと増はさっさと寝てしまうのです。シベリアにきてか

れこれ３年になる私ですが、こんなことは初めてでした。私もつい心がゆるんで増の厚い人情が有難くなり商売をはなれてとりもちました。増も大変喜んでこんな気持ちで一生くらしたいもんだなあ、別に急ぐ必要はないから、あと５、６日泊まっていこうとその日からどこそこと食べあるいたり遊びまわったりで夢のように過ごしました。」

「増はこの間、私の身体には一ぺんも触れたことはなく、大江を上下する汽船をみて、『ここは清国の船が一せきもなか、ここは清国の領土だった。今は露満の国境になってしまった。』と嘆いていました。

私はこの男はただの商人ではない、役人でもない、増につかえる二人の者は従者のように使えている。ひょっとするとこの増はうわさに聞く馬賊の出ではないかと疑い始めました。それで私は『自分は一生日本へ帰れる身ではない。不思議なご縁でお近づきになりましたが、御親切にほだされて、今では貴方と御一緒でなければ暮らせない気持ちになってしまいました。足手まといには決してならないようにしますから、どうぞお仲間に入れてください。お願いでございます。』と言いました。

すると、増は突然居住まいを正して、恐ろしい顔になり、きりっと私をにらみつけて誰に聞いたか？と言いますので、『私は誰にも聞きません。私の脳が悟ったのです。』と言いました。増はしばらく考えていたが、『よろしいわかった仲間に入れましょう。』と言い、私にいくら払えばいいかと言うので、先ほど言った300ルーブルを支払い今となったのです。」

ウ　そしてお君は自分の番頭である趙を真清に紹介した。増の先輩格にあたるのがチチハルの宋紀であり、その愛人はお花である。真清はこのお君と共に増、趙と交情を結び、ロシアの侵攻を防ぐべく情報活動を行うことになる（P107）。

エ　増はお君、趙、真清とハバロフスクホテルのレストランで会合をするシーンがある。レストランは、ロシアの官吏と軍人で一杯になり、ブラゴヴェヒチェンスクの大虐殺の話をする。「つまるところこの事件で満洲は大ロシア帝国に併合され、世界の地図が塗り替えられる。鉄道工事もどしどし進捗する。それにつれて満州の鉱山が開発され欧亜両大陸にスラブの大帝国栄えるというわけだ。」「さあみなさん大ロシア帝国の成功を祝し、ツァールの万歳を叫びましょう。」と官吏がシャンパンの杯をあげれば、一斉に一同は起立し、ツァール万歳を唱えた。増世策の顔は青ざめて、机の端においた両手を固く握りしめたまま運ばれた皿に手をつけようともしない。なんだか、カサブランカのリック（ハンフリーボガード）のレストランでドイツ軍が乾杯をしたのに対し、フランス人がラマルセイユを歌うシーンを思い出させる。

オ　増は後にロシア軍によって捕らえられ斬首された（P221）。

お君は物語の後半、真清が写真館をハルビンに開いた後、石頭河子で男子の

支那服で弁髪のお君と再会する(P330)。「馬賊の女房が尾羽打枯(おばうちから)して、郷里へかえれるものですか。死ぬ機会を失うと不思議に気が強くなるもので配下の手前どこまでも生き抜いてやりたいという気になりました。」そんな気持ちでいるときにたどりついたのが鉄道相手の枕木商売だという。最後にお君は「私は一生この山を出ません。この山で死ぬ覚悟をしています。」という言葉で結んでいる。

(3) お花

ア　お花は長崎生まれで、騙されて中国大陸に連れて行かれ、馬賊の頭目の宋紀に拾われるまでは女郎の生活をしていた女郎である。彼女は、いつの間にか銃を持つ、馬に乗ることを覚えた。

　お花は、馬賊は泥棒ではなく満州の旅の安全を保障する漉局（ルーチー、警察官と保険会社を合わせたようなもの、P192）と考えている。広い満州では筋を立ててルーチーに頼めば警察より確実に保護をしてくれる。

イ　お花は真清が初めて満州で出会った女（女郎）である。真清は 1900 年（明治 33 年）2 月 16 日、初めてお花と愛暉で会った後、再び、1900 年（明治 33 年）10 月半ばにハルビンで弁髪をした一郎と名乗るお花と再会する。真清はその時洗濯屋を開業し、その手伝いをお花に頼む（P181）。

ウ　しかし、真清はその後、ウラジオストックに行き、日本軍政府から、ロシア軍の東亜征服計画の推移を見守り、情報収集のための手段として、写真屋を開業するよう指令を受ける。

エ　写真屋とは、記念写真の撮影という表の看板の外、ロシア軍の軍事機密の撮影、土地の形状の撮影等、軍事的諜報活動にとっては非常に重大な任務となるのである。

　ロシア人は写真撮影を非常に好むという話を真清は知っていて、日本政府からの当時のお金で 3,000 円の援助を貰い開業するまでに漕ぎつける。

オ　しかしながら、そこにハルビンにいるはずのお花から発信地ハバロフスクの一通の書面が来る。書面には「大至急、当地でお目にかかりたいことがあるので直ぐお越し下さい」と書かれていた。真清がハバロフスクの駅に降りると弁髪の男装姿のお花が現れて（P257)、「急にお伝えしなければならないことが出来ました。洗濯屋の方は順調に行っていますが、写真屋の方に妙な噂が飛んでいます。菊地写真館（真清は満州では菊地正三と名乗っていた）は参謀本部の仕事で、菊地という男は陸軍将校だというのです」と言って早く逃げて下さいとアドバイスした。そこで、真清はウラジオストックに戻りひとまず菊地写真館から身を引くことになった。そのあと真清は一旦はハルビン（P271）に行き、お花に会い、お花とともにハルビンの北にある警戒厳重なチチハルに向かい、その後ハルビンに戻った。

カ　ハルビンに戻ると、菊地写真館は大変な繁盛をしていた。ロシア軍やロシア人個人からの撮影の依頼が日々 40 ～ 50 名あり、軍と鉄道の注文が多かった（P290）。

例えば、軍当局や鉄道から東清鉄道の建設状況や重要建築、橋梁などあった。又、日本女郎やロシア美人の写真やけしからぬ写真まで沢山複製して役人や軍に寄贈してご機嫌を取って、真清はその売り上げのうち 4,500 円という大金を渡し、お花は 1901 年（明治 34 年）9 月 25 日、出帆の汽船でハバロフスクの経由ウラジオストックに向かい日本に帰国した。日本には無事に帰国したようである。

お花は、真清との旅行中、中国語、ロシア語を駆使して真清の旅の安全を助けた。

（4）お米

ア　真清は 1900 年（明治 33 年）9 月 5 日、ハバロフスクからブラゴヴェヒチェンスク号に洗濯屋としてハルビンに趙と共に向かう（P123）。船旅の途中、清国側からの銃声があり、9 月 14 日三姓城外から趙と陸路旅行することにした。すると、三姓城外の土煉瓦の小屋の中から日本語で助けを求める声が聞こえた。3 人の女である。「兄様（アンシャマ）、助けてくれまっせ」「もう一週間食べておりまっせん」3 人の女は油気の抜けた髪を振り乱し、青黒い汚れた顔の女が窪んだ眼を光らせて怯えていた。首を差し入れて小屋の中を覗くと異臭がプウンと臭っていた。3 人の女は半破れの汚れた蓆を土間に敷いて、ロシア更紗の服といっても上衣の方は破れ、胸は裂けて乳房ははみ出し、スカートは乞食同様に破れちぎれて赤い汚れた腰巻が漸く恥を隠している程度であった。素足にはチグハグの支那靴を履いていた。まぎれもなく女郎衆の行き倒れだった。よほど弱っているとみえて 3 人は、もぞもぞと身を起こしたが、何も言わずに寄り添って真清と趙の顔を眺めて見るだけであった。

イ　真清が、おい怖がるんじゃない。僕は日本人だ。一体この態はどうしたんだと言うと、「兄様、助けてくれまっせ」、「もう一週間食べておりまっせん」と泣き出した（P135）。

その 3 人が、お豊、お槇、お米である。3 人の女たちに同情した真清は趙に身にまとうものを買うように指示した。

以下は、このときの 3 人の様子の抜粋である。あまりに面白いのでこのまま引用する。

ウ　女たちの服装を整えに街に行った趙が帰って来た。大きな包を解くと、どこでどうして集めたものか、女の支那服が 3 着、下着までそろえて出て来た。靴もどうやらはけそうである。化粧品や櫛までが趙の細かい心遣いを示していた。

「よく集まったなあ、店はどこも閉まっていたろうに…」

と言えば、趙はニヤニヤ笑って、

「苦労しましたよ」

と言いながら、女３人に分け与えた。彼女たちは水桶で顔を洗い肌を拭い、小屋の中でいそいそと服装を整えた。私と趙は木陰に横になって青空を眺めて待った。

30 分も要したろうか、小屋から出て来た彼女たちを見て私は驚いた。服は大して上等ではなかったが、どうやら身丈に合っていた。髪は油で艶々していたし、薄化粧までして、心持ちか瞳まで濡れているように見える。

「女は化けものだと言うが、これは驚いた」と眺めていると、年下の２人が恥ずかしがってお豊の蔭にかくれた。呆れたものである。今の今まで死と直面していたのに、身なりを整えただけで女の本性までが蘇って来た。これなら連れて歩いても、おかしくはないだろう。だが、生死の境を脱したばかりの彼女たちである。歩かせるわけにいかない。飯店を見付けて一夜を明かすことにした。

胃袋を満たし、蒲団の中で寝て、朝となれば顔を洗い歯を磨き…こんな当たり前のことが彼女たちを有頂天にした。

お豊は起き抜けから喋り続けである。お槇は無口で黙りこくっており、１番若いお米はお槇の蔭にかくれて１人で恥かしがっていた。女たちにとって私は大切な救命主だったに違いないが、私が便所に立ってもくっついて来て眼を離さないのには閉口した。逃げられては大変だと思ったのであろう。少し早かったが午前６時宿を出て牡丹江を渡った後は、５人一塊となって歩いた。お豊はまだ私を信頼出来ないらしく、哈爾浜までは是非お伴させてくれと願った。趙はしきりに感心している。

「日本の女は偉い。支那の女にも韓国の女にもこんな真似はできません。二ヵ月の間一文無しで、着のみ着のままで 500 露里 600 露里も歩き廻るなんて…しかもこの騒動の中で、男にだって出来ることじゃありません。増先生がお君さん、紀鳳台先生がお房さん、宗紀先生がお花さんというように、先生たちは皆日本の女性を夫人に迎えていますが、当然のことですね」

「趙君どうだい、この中の一人を夫人にしちゃあ」

とひやかしたら頭を掻いて笑った。

エ　これを読むと、女性というのは窮地に陥っても媚びて艶めかしい。女性というものは、そういうものなのかと未だに私は不思議に思えるのである。

オ　さて、３人は無事人間性を取り戻し、馬賊の副頭目の夫人として旅を続けることになるが、増世策と同じ馬賊の高の馭者の李という男から突然３人は連れ去られる。

そこで、一旦は真清は３人の女郎たちとは離れ離れになり、1900 年（明治 33 年）12 月末頃、拉林城の獄舎に投ぜられる。そこで、１ヶ月から２ヶ月投

獄生活を続け、（P205）動物園の猿のように木柵に両手を差し挟み饅頭がくるのをいつものように待ち焦がれていると、そのときふと眼に映ったのがお米であった。真清は懸命に声を振り絞り、夢中で両手を柵外に揺り動かすと相手もそれが分かり、お米であることが判った。（P209）「お米は「お別れしてまだ半年も経たないのに、お話はともかく一刻も早く出られるようにしましょう。一寸の間だけお待ち下さい」と言って支那兵と交渉し奇跡的に真清は開放され、お米はそこで真清と別れた後の行動を説明した。（これは省略する）

お米はその後、囲われていた馬賊の元を離れ真清と一緒に旅をすることになる。

しかし、密林、零下30℃の凍土の満州の気候は厳しく（P224）、体力が尽きて真清が目を離した隙に自ら行方を眩ましてしまう。きっと足手まといになることを気遣い自ら命を絶ったものだと思われる。

（5）その他、人買船に乗船する女達

真清が1901年(明治34年)2月20日､ハルビンで写真館を開くことが決まった後、真清は陸軍の諜報員だという噂が流れ、逃亡生活を続ける中、明治34年7月22日元山から城津へ向かう途中、人買船に遭遇する（P264）。小さな漁船の中に赤い腰巻だけの裸体の日本娘が12人、褌一本の男が2人、合計14の裸体の一団がひどく疲れ果ててうずくまっていた。

真清は見るに堪えないこの光景に見ていてばかりいても仕方ないので収容した。

（6）このように本物語は、悲劇的な境遇の中でたくましく生きてきた女郎達を紹介している。この女性達の魅力は一体何なのか、非人間的な扱いをされてきた中だからこそ、美しさやたくましさが映えると言ってもいいと思う。

7．真清の文章のタッチ

これまでに真清の文章をいくつか抜粋したが、「曠野の花」の面白さはその文章のタッチの良さにある。

そのいくつかを最後に紹介する。

（1）シベリアの奥地にも春が来た。それは雄大な春の進軍である。半年の間、氷塊に閉ざされた大黒竜江が揺らぎはじめたのである。昼となく夜となく氷原の割れ崩れる音がここかしこにひびき渡ると、まもなく氷塊が思い思いに傾き崩れ転じながら流下し始める。この雄大な春の行進は年々繰りかえされて変わるところもないが、陰鬱な冬籠りにあきた人々は、江岸に群がってこの春の進軍を楽しみ賑うのであった（P27）。私も流氷の壮観が好きで日に二度三度と見物に出かけ、子供のようだとポポーフ夫人に笑われた。流氷が流れ去ると猛烈な濁流が渦巻いた。こうなると汽船が動き始め、ジャンクが通い出して、人も街

も一時に蘇生するのである。

満州の土地に降り立った真清が初めて迎えるシベリアの大地の春の訪れの描写である。日本の「春高楼の花の宴…」のイメージとは全く異なる。待ち望んだ春の雄大な動きにシベリアの奥深さを感動する真清の気持ちが伝わってくる。

（２）ついに一斉に小銃を発射し始めました。叫喚と銃声と泣声と怒号と、とてもとても、あの地獄のような惨劇は口では言えません。二隊に分けたと言っても全部で 2,000 名近い人間を一束にして殺そうというのです。殺される方では殺されまい、何とかして逃れたいと必死の形相で暴れる、走る、拝む、潜り込む、殺す者も殺される者も夢中だし、まるで気ちがいと言って良いか、鬼と言ってよいか、この世であんなことが見られるなんて、私は今でもまだ夢心地です。殺される奴がもし荒くれ男だけだったら、あんなに無残ではなかったでしょう。子供を抱いて逃れようとする母親が芋のように刺し殺される。子供が放り出されて踏み潰される。馬の蹄に顔を潰された少年や、火の付いたように泣き叫ぶ奴等が、銃尻で撲り殺される。先生先生と縋り付いて助けを乞う子供を蹴倒して、濁流へ引きずり落す。

良心を持っている人間に、どうしてこんなことが出来るのでしょう。良心なんてない野獣になっていたのでしょうか。子供の泣き顔を銃尻で叩き潰す時に、自分の良心も一緒に叩き潰してしまったのでしょう。（P40）

これはブラゴヴェヒチェンスクの大量虐殺の光景をまざまざと目撃した真清の知人のロシア人が語ったものである。

（３）私は町田少佐等と別れ、東京に残して来た母と妻子に訣別の便りを書いた。思いがけぬことになってしまった。今度は生きて帰れないからである。事態は急であったので、翌１７日ウラジオストック発の汽車でまずニコリスクへ向った。私はもうロシア留学の青年紳士ではなかった。油だらけの汚い木綿のルパンカに百姓靴を履き、頭髪の油を落して不精髭をそのままに、疲れた中折帽をのせて、どう見ても苦力然たる恰好であった。汽車は勿論三等、手ぶらの旅は気楽だ。私の所有物は片手にさげた小さな風呂敷包み一つだった。その中には手拭と歯磨粉と歯ブラシが入っているだけだった。

生きるにも必要なもの以外は皆棄てた。生きるに必要のない自尊心も見栄も一緒に棄ててしまった。（P57）

これはブラゴヴェヒチェンスクの大量虐殺の後のロシアで清露の関係が一挙に緊張感を増した後ウラジオストックに行き、私費留学生の身分から、軍人現役へ復帰を命ぜられた時の真清の心境である。生きるに必要なもの以外は全て棄てないと生きていけない。そして、その中には自尊心も見栄も不要ということであろう。

（4）どうも人間という生臭いものは、仏臭い説教ばかりでは立直ることが出来ないものだ。悲惨のどん底に突き落されるか、意気に感ずるか、深い愛情を浴びるか、なにか娑婆臭い感動がなければ駄目ですな？（P85 ～ 86）

この言葉は、本願寺の僧侶を装う安倍道瞑師の言葉である。人を喰ったようでもあるし、真実を言い当ててもいる。これは、夫婦喧嘩で仲直りした菅井夫婦を見ていた同師の感想である。荒くれ集まる、倫理観の欠乏した中での人の生きる道を説いているのである。これもまた、日本人独特の感性と倫理観と思える。

（5）明治 34 年 2 月 20 日、4 人は毛皮の外套に身を包み、防寒靴に膝を没して、その上を縄でぐるぐる巻いて、柳行李を交る交る肩にかつぎながらウラジオストックを三等車で出発した。ニコリスクからはまだ客車は通っていなかったので、例によって私が車掌に小金を与えて土工車に乗った。薪で走るのろい汽車だが、無蓋土工車だからまことに寒い。材木屋煉瓦の陰に、4 人は熊の穴ごもりのように丸くなって寒風をふせいだ。凍結した鮭の燻製やカルパスを煎餅のようにパリパリと齧って過すことに私は馴れ切っていたが、武藤大尉や阿部野氏や秋山氏には少々つらいことであったらしい。

「貴様はもう身体まで馬賊になりきっておるな」

と武藤大尉が私の食いっぷりを眺めた。考えて見れば、私も内地にいた頃は神経質でやかまし屋で、三度三度の食い物から着物にいたるまで、随分と妻に面倒をかけたものである。それなのに今では真黒に蝿のたかったパンや凍結した鮭を平気で食べた。満州に住む下等社会の人々や馬賊連中と起居をともにしている間に、いつの間にか彼らの運命に対する柔順さと、運命に従って生き抜いてゆく根強い生活力を、無意識のうちに体得したのであろう。蝿のように追いやられ、蝿のように叩き殺されても、また群がり戻って来る清国人の生活力が、いつの間にか私に浸みついたのであろう。武藤からそう言われてみると、今日の自分が不憫に思われた。（P243）

これは真清が新たに写真館開設の指令を受けて、ウラジオストックからハルビンへ武藤大尉、阿部野利恭氏、秋山運次郎氏と汽車に乗って行った時の部分である。真清の蝿のように追いやられても生きていくという生き方が身についてしまったことを不憫と思いつつ人生の生き方を示唆している。

（6）年の瀬も迫った 12 月 24 日東京に着くと、僅か 2 年余りの留守であったのに、私は 10 年ぶりに帰ったような錯覚にとらわれた。師走の東京にはもう戸毎に門松が飾られていて、紙凧や追羽根が店頭に売られていた。冬とは言っても青い樹木の多い赤坂の青山通りを通って、北町 6 丁目 33 番地の黒板塀の静かな

母の家が眼にしみた。

「生きているとは思っていたが、心配していたよ…」

と母は私の腕をとって、眼頭を拭った。ロシアに行く前の一年間は次々に大病に苦しめられた妻も健康を取戻していたし、長女も無事に育っていて、見知らない私を不安そうに見て避けていた。青畳にあぐらをかいて緑茶をすすると、満州の曠野とともに凍結していた私の感情も解けて来た。つい先日まで続いていた大陸の厳しい生活が嘘のようである。

ありがたい国だ、美しい国だ。澄明な水、凍っていない卵や魚、新しい野菜…なにもかも忘れていたものが、一度に心と身を包んでしまった。

大人も子供も、男も女も、罪もないのに撲り殺され射ち殺され馬蹄に蹴散らされて黒滝江に葬られたあの大虐殺などは、この世にはあり得ないことのように思われて、過ぎて来た二年余の体験を母や妻に語る気にはなれなかった。(P301)

これは、1901 年（明治 34 年）12 月 24 日、真清が一時帰国した時に述べた言葉である。ロシア、満州での悲惨な出来事と日本のあまりにも美しく、平和な国とのギャップに感慨を抱いている様子が分かる。

（7）「引揚げよう、われわれの任務は終った。万事終った。引揚げよう。われわれはブラゴヴェヒチェンスクの大虐殺を内地でも満州でもみたくないからな」

私は両手をさし延べた。一同は私の手を中に円陣をつくって握手した。引揚げだ。苦しくもあり楽しくもあったこの 4 カ年、私にとっては生涯忘れることの出来ない 4 カ年であった。

ブラゴヴェヒチェンスクの大虐殺に遭遇して以来、満州を四方八方に駆け巡って辛酸をなめた。馬賊の賓客になり、洗濯屋になり、ラムネ屋、写真屋、雑貨屋と、千変万化の芸当を演じて、どうやら目的の半ばは達したと信じたが、われわれの任務にどれだけの効果があったか判らない。しかし任務は終った。一同は引揚げの仕度にかかった。一切の家財は放棄せねばならぬ。疑われる一切のもの、焼増の印画紙や各地からの通信等は纏めて片っ端からペーチカに放り込んで焼いた。あれも焼いた。これも焼いた。あとは手廻品だけ纏めればよい。私は手持の現金をかぞえて見た。1500 ルーブルあった。これを内ポケットにねじ込んで毛皮の外套を引っかけて玄関に出た。

「さようなら哈爾浜、さようなら大陸よ、四年間の苦労はすべてこの日のためであった。さようなら」(P343)

この部分は、この物語の最後の部分 1904 年（明治 37 年）2 月 3 日、日露戦争開戦の知らせを受け真清がハルビンから出ていく模様を描いている。わが心のハルビンに対する惜別の思いが出ている。

８．最後に

（１）この物語は二つの点で衝撃的である。

一つは、人間はどんな残忍な事でもするし、それは生きるためにはやむを得ないことがあることを教えてくれる。

もう一つは、明治時代の、日清戦争、日露戦争という、重大事件について、中国、満州、ロシアについての知識が現代の日本人には全く欠けていたという点である。

前者は、法や正義や良心というものが全く人間を守る手段とならない時に、人間はどう生きるべきか。その中で人間はどう尊厳を保つことができるかを問うている。

後者においては、日本の政治、外交が、アメリカ、ヨーロッパにのみ目を向けて、お隣の中国、ロシアについての知識、関心がないことを知らされる。

どうして、近隣の中国、ロシアより遠い、アメリカ、ヨーロッパのみに日本が関心が行くのか。これは重大な外交の失敗であるかもしれない。

馬賊や女郎たちの悲しくもたくましい世界が繰り広げられる中、生きていくために自らの尊厳も羞恥心も捨てなければならない時があることを日本人は知るべきである。そして、その上でこそ、人間の尊厳を主張する必要があると思う。

（２）この物語は面白すぎて、また難解すぎてコメントのしようがない。

このため、私は、この物語の説明をするのが断片的なものになり、脈絡のないものになってしまった。

そして、そのことを繕うために最後はとうとう物語の抜粋の形をとってしまった。読者の皆さんは、私が何を言いたいのか分からなくなって、このエッセイを途中から放り投げるに違いない。でも最後まで読んでくれた殊勝な方には是非、実際にこのフルストーリーを読んで、何か日本が大事なことを無視して今の繁栄があると思っていることを反省していただけたらと思う。

次は、第３作、「望郷の人」（日露戦争）である。

真清は、日本が決して全うな道を歩んでいるとは言っていない。ただ、軍人として与えられた仕事をこなしているだけである。その姿は多くの日本人と同じものであろう。

第３作も、日本人にとって真の日本、日本のあり方、等身大の自分を発見する物語になっている。

乞うご期待！

名称と登場人物の説明

1．義和団事件

1900年（明治33年）6月20日に義和団と称する中国人の秘密結社が、欧米諸国の排斥を目的とした一連の暴動事件。

1900年（明治33年）、清国の西太后はこの叛乱を支持したが、西欧諸国の中国進出のきっかけを許す結果となった。日本もこの機会に中国、満州進出の足掛かりとした。

清国は1901年（明治34年）5月29日、北京列国公使団へ莫大な賠償金を支払わされ、同年7月31日、日本、ロシア、イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、イタリア、オーストリア＝ハンガリー帝国8ヶ国は北京から撤退した。

2．カムール川、スンガリー川

（1）アムール川（黒竜江）は、モンゴル高原東部のロシアと中国の国境にあるシリカ川とアルグン川の合流点から少し流れる全長4368㎞（世界8位）の川である。河口は、オホーツク海に流れる。流域の都市は大量虐殺のあったプラゴヴェシチェンスク、その対角の黒河、愛暉、ミハイロセメノフスキー。ラハスス（拉哈蘇蘇）→ハバロフスクから北東へ進路を変え、ロシア領内に入り、オホーツク海のアムール、リマンに注ぐ。

（2）スンガリー（松花江）は、中国東北部を流れる川。アムール川（黒竜江）の支流。ハルビン（哈爾浜）が拠点都市。

3．東清鉄道

ロシア帝国が満州北部に建設した鉄道路線。満洲里からチチハル（斉斉哈爾）を経て、ハルビン（哈爾浜）へ続く本線とハルビンから大連を経て、旅順へと続く支線からなる。

1891年（明治24年）、ロシア帝国はシベリア鉄道建設の着工と日清戦争後の三国干渉により、遼東半島の鉄道敷設権を手に入れ、大連までの進出を視野に入れていた。これは、当時の日本にあっては、日露衝突の前兆と考えられた。

4．登場人物

（1）田村怡与造大佐…相模丸から降り立った人物の一人

（2）町田経宇…後の陸軍大将、相模丸から真清と共に降り立った人物の一人

（3）花田仲之助少佐…清水松月という西本願寺住職（P10）、謀報局ウラジオストック在住の謎の人物

（4）朝日新聞・阿部野利恭（熊本）…真清の重要な同僚。

（5）武藤信義…ウラジオストック駐在武官（後の男爵元帥）

（6）水野花（P24）…栄紀の世話になる「花」の代表的人物の一人

（7）ポポーフ夫人（P50）…真清がロシア語の勉強の為に居候する家の夫人

（8）笹森儀助（P57）…ウラジオストック発ニコリスクの三等室車の日本人。ところどころ破れて色の褪めたフロックコートにデコボコの山高帽をかぶり、腰にはズタ袋をぶら下げ、大きな袋をさらに肩から斜め下げていた。縞のズボンにカモ色のゲートルを巻き、袋の重みを杖にささえられて汽車に乗り込んできた。青森県出身の地理学者。県会議員、青森市長もつとめたが、三国干渉に憤慨して、朝鮮、満州に出て行った人物。

（9）真野新吉（P63）…ニコリスクからポグラニーチナヤへ行くときに隧道の鉄道工事に従事。ロシア人工夫の娘と結婚するが死亡。麻製のルパシカを真清はもらう。

（10）安倍道暝（P69）…ハバロフスク在住の西本願寺住職。得体が知れないが、謀報部員でもあり、軍人でもある。撫順炭鉱を発見した。ただの僧ではない、政治、軍事、経済に通じる。（P84）

真清は「二、三ヶ月位は食う方の心配はありません。」と言うと、

「第一食うこと、寝ること、交媾すること、死を怖れること、この四つは人も獣類も変りがない。食の準備よりまず心の準備、これが万物の長たる人間の値うちでしょう。」と説教する。明日をも分からない未開の地ロシアで、このような説教をする日本人がいることに驚く。真清は面倒な坊主であると感じた。「どうも人間という生臭いものは説教ばかりでは立直ることができないものだ。悲惨のどん底に突き落とされるか、意気に感ずるか、深い愛情を浴びるか、何か老婆臭い感激がなければ駄目ですな。」（P85）

（11）菅井五郎とお雪（P72）…東洋館という日本旅館の夫婦。菅井五郎がばくちに負けて、女房のお雪を借金の方に連れていかれた。満洲各地には血の雨が降っていたが、ハバロフスクには黄金の雨が降っていたとある。

（12）石清泉という掌櫃（大番頭）…増世策の頭、その子分が李（P80）

（13）お君（P88）…お雪の友人でおてんば娘。女郎あがりである。

曠野の「花」の一人。主人は増世策。韓人村に誘われる。（P90）韓人村というのは、韓人政府の圧政に堪えかねて満洲へ渡ってきた朝鮮人が住む町だったが、大部分が労働者（ヨボー）で、お君の住む韓人村は特に人気が悪く、小泥棒と淫売と疫病と迷信の巣であった。

（14）増世策（P92）・・・2,000 名の配下を持つ馬賊の頭目。石清泉の頭。色白の痩形の小男。増の右腕が趙。拠点は掖河。曠野の「花」で活躍する代表的馬賊の一人。

（15）趙（P97）・・・山東生まれ。15 才の時に長崎→神戸・大阪→横浜と 8 年間日本で暮らした。九州人より江戸弁は上手い。増世策の部下。

（16）崖（P125）…真清がハバロフスクからハルビンまでの船の中で崖と知り合う。総督府の通訳。ロシアのスパイ。なまりのない江戸弁を話す。趙の日本語はウラジオ仕込みという。（P126）

船の中は食いこぼしのパンや腸詰や魚肉が腐敗し、それに満洲名物の蠅が集まって来て、我々の背中には百匹近い蠅が汗を舐めている。じっとしていると耳といわず鼻といわず、口元や襟首を無数の蠅がはいずり廻り、舐め廻り、腹が立つが何ともならない。

蠅の死体に蠅の群れが集まって舐め始める。耳を澄ますと扇風機のような羽音が耳の廻りに立ちこめている。周囲の者はそれでパンを食ったり賭博を打ったりしている。寝ていると顔中を蠅が舐め廻し、ちょっと見ただけでは人相が判らない。甲板上にいる人間の群れのすべてがこの状態であった。沿岸の蠅を掻き集めて運搬しているようなものだった。

(17) 豊、槙、米の三人の女郎（P133）…「兄様（アンシャマ)、助けてくれまっせ・・・・・」となまめかしくも必死な助けを求めている三人の女郎。三姓に上陸。城門の外で煉瓦造の小屋から上衣の肩は破れ胸は裂けて乳房がはみ出し、スカートは乞食同様に破れちぎれて、赤い汚れた腰巻が漸く恥を隠している程度であった。素足にはチグハグの志那靴をはいていた。まぎれもなく女郎衆の行き倒れだった。お米は後に真清を牢獄から救出してくれた女性である。（P208）この三人、特にお米も曠野の「花」の一人である。

(18) 和田八次郎（P146）…ハバロフスクで安倍道瞑師の家を探していた時に会った人物。馭者は李（P145)「志那服を着て弁髪を垂らしていた」のは本人。李に豊、槙、米の三人の女郎を欺し取られる。（P151）

(19) 鉄道敷設の為の日本人 10 名（P163）…ロシア人 8 名、イタリア人 6 名、フランス人 2 名の合計 26 名。守田嘉吉。ロシア鉄道が哈爾浜―一面坡、石頭河子―老爺嶺間、磨刀石―ポグラニーチナヤができつつある時の話である。資本家は安心して投資できるとロシア人技師が話す。

(20) 森（P177）…ハルビンで会った飲食店経営の上等兵。馬賊は押入り強盗には慣れているが戦争は駄目だ。てんで戦術を知らない。阿什河から軍使がきて阿什河市民の降服を申出た。それでロシアはカザック歩兵一中隊を派遣した。ところがその途中に数百名の馬賊が待ち伏せしていて、呑気に行軍していたところを青竜刀と槍で襲ったからたまらない。命からがら逃げて帰ったが、十二、三人の死者と三十何人の重傷者を出した。それでどうなったかと言えば、増援隊が到着すると阿什河攻撃が行われ、残留市民は全部虐殺されるし、女は捕らえられて辱められ斬殺された。馬賊の知恵は大体こんなもんだ。こうして満洲はロシアに蹂躙されてしまうのだ。

(21) ハルビンの写真館（P254）…山本逸馬支配人（甲武鉄道、信濃町駅長)、成田常吉（江木写真館技師)、宮本、岡庭（小川写真館）写真器材は小西六右衛門商店、ワホウスキー（東清鉄道運輸部長)、寺見機一（郵船会社ウラジオストック支店長)、秋山運次郎（通訳、柔道師範）

(22) 長谷川四迷（二葉亭四迷）（P307）…嶋川毅三郎、河津政次郎とともに三人の浪人組が一緒になって菊池写真館に寄食していた。

安部・有地法律事務所　所長